

平安京右京三条三坊五町跡の邸宅

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 約400年間続いた平安時代。平安京内には、数々の皇族・貴族の邸宅が造営されました。平安京右京三条三坊五町跡もその一つで、2017年5月から12月に実施した発掘調査では、平安時代前期(9世紀頃)の1町規模(約120m四方)とみられる邸宅の一部が見つかり、その構造や変遷が明らかとなりました。

調査地は、現在の中京区西大路三条交差点の西側、平安時代には北を姉小路、東を宇多小路、南を三条大路、西を馬代小路に囲まれた区画に位置します。平安京右京三条三坊五町では、これまでに2回の調査を実施しており、東部で平安時代前期の建物・柵・井戸・姉小路南築地内溝など、南東部で平安時代前期の大型建物・溝などが見つかっています(図1)。

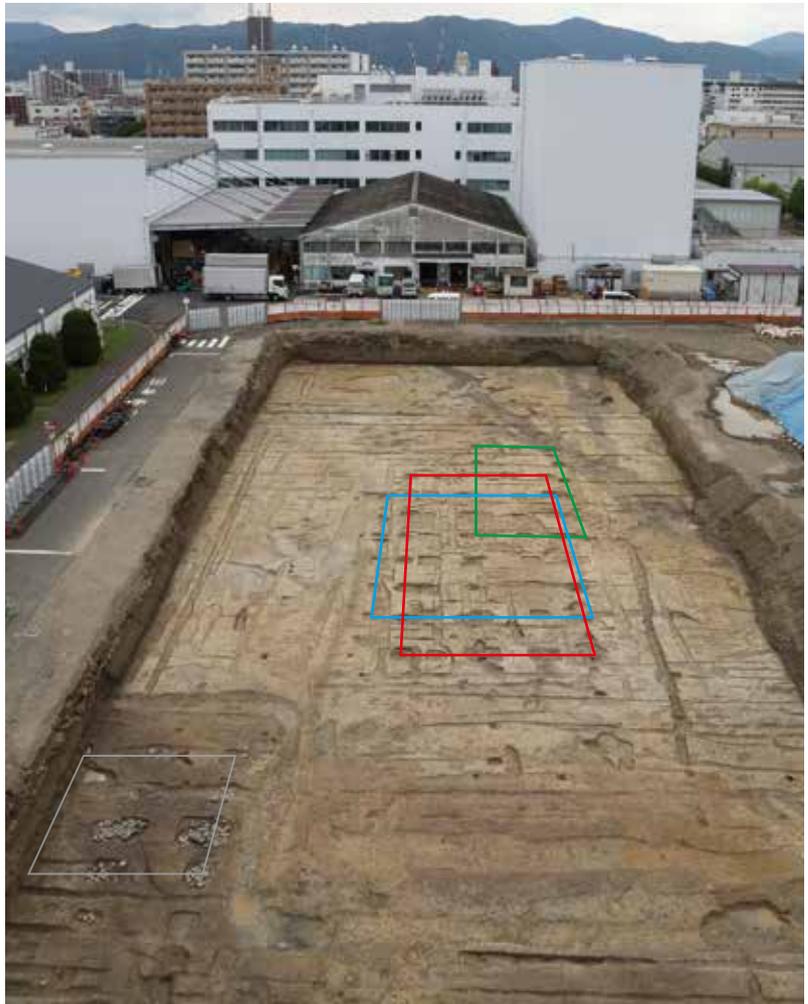


写真1 調査区南半部全景(中央が建物1、左手前が建物3、東から)

今回の調査は、五町の北西部約4分の1町(約4,500㎡)の範囲を対象としました。調査範囲が広いため南半部・北半部に分割して調査を進めました。

見つかった遺構 調査では平安時代前期の建物・溝・土坑および姉小路などが見つかりました(写真1・図2)。

中央南部の建物1は建て替えが行なわれています。古い方(建物1古)は、東西約15m、南北約10.8mの東西棟で、桁行5間×梁間2

間の身舎(建物の中心部分)の南北両面に庇が付き、新しい方(建物1新)は、東西約21m、南北約9mの東西棟で、桁行7間×梁間2間の身舎の南面に庇がつく、平安京域では最大級の建物です。

建物4は東西約14.3m、南北約5.4mの東西棟で、桁行5間×梁間2間の庇がない建物です。建物1の北西部と重複する位置にあり、建物1古よりもさらに先に建てられました。

建物5は建物1の北側に位置しており、建て替えが行なわれていません。古い方(建物5古)は、東西約14.3m、南北約8.4mの東西棟で、桁行5間×梁間2間の身舎の南面に庇が付き、また、新しい方(建物5新)は、建物5古と同じ規模・構造で柱一列分、南へ移動した位置に建て替えられており、柱穴の一部には柱根・礎板が残っています。建物1と建物5は中心軸がそろっていることから、これらは2棟

一組で使用され、同時に建築、建て替えが行なわれたと推定できます。

東部の建物2は、1985年の調査で東端を検出した建物の延長部にあたります。今回の調査で西端を確認したことから、東西約12m、南北約7.2mの東西棟であることが確定しました。桁行5間×梁間2間の身舎の南面に庇が付きます。柱穴には柱根が残っていました。

南東部の建物3は、南北約6m、東西約6mで、東西3間×南北2間以上の総柱構造の倉庫と考えています。柱穴には河原石を入れています。

建物2の西側、建物3の北西側を囲う形で屈曲する溝は、幅約1.5～3mで、邸宅内を東西に区画しています。また、建物5の北に接して、邸宅の北側を区画する築地と築地内溝があります。

築地塀の北側は姉小路ですが、路面の大部分や南側溝は東西方向の大規模な溝（水路）となっており、調査区北端に路面の一部と北側溝が残るのみです。溝（水路）は平安時代中期から後期に形成されたことがわかりました。

まとめ これまでの発掘調査成果から、右京三条三坊五町は1町規模の邸宅であったと考えられます。

今回の調査で南北に並ぶ建物1・建物5が見つかったことから、邸宅北西部に2棟の大型建物からなる区画があったことが明らかとなりました。屈曲する区画溝西側の大型建物周辺からは、遺物があまり出土しないのに対して、東側の建物や倉庫周辺からは、多数の灰釉陶器・緑釉陶器・土師器・須恵器の食器類の

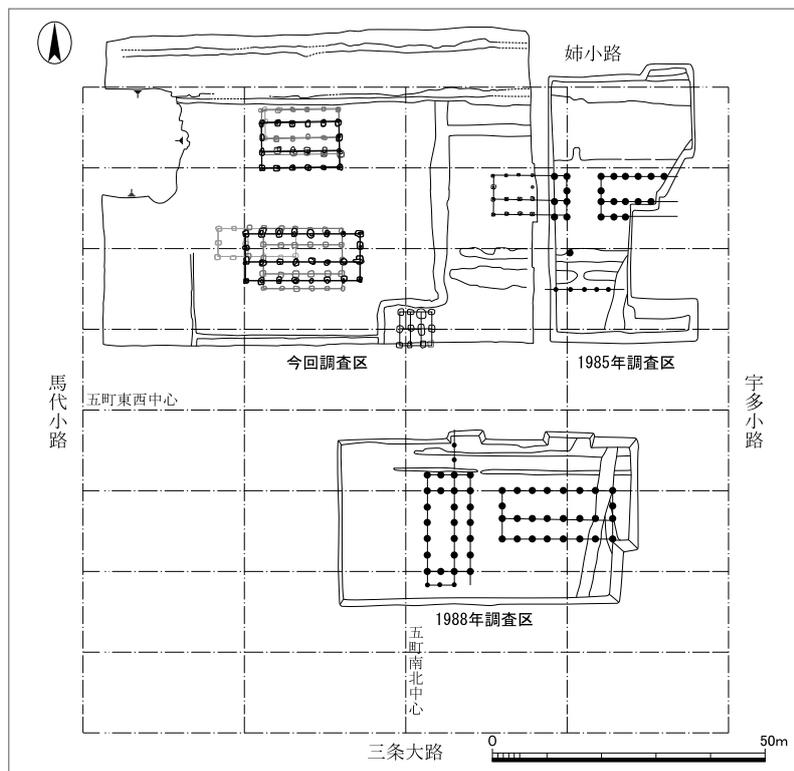


図1 右京三条三坊五町遺構概要図

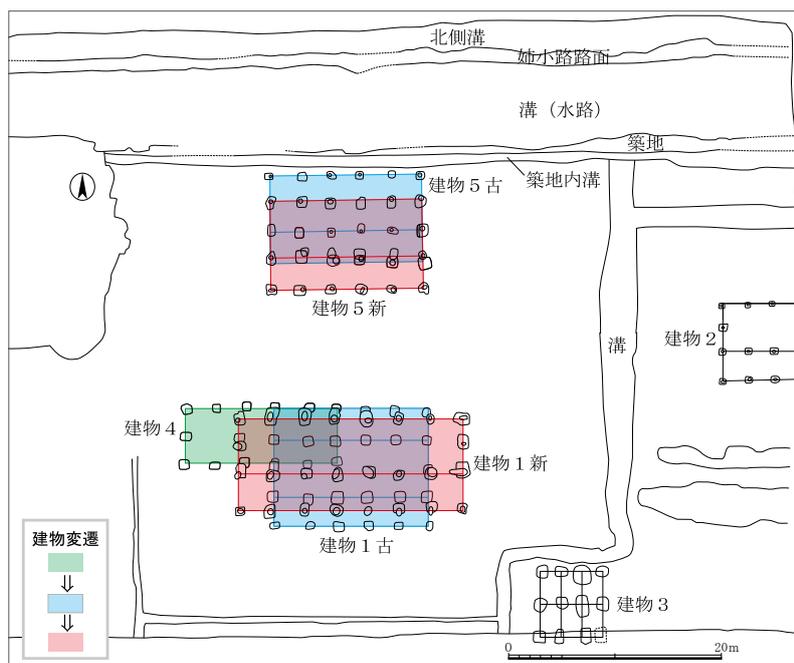


図2 建物配置と変遷の概要

ほか、調理具の須恵器の鉢・土師器の甕などが出土しました。また、「政所」「屋」などの文字を墨書した土器も出土しています。「政所」は日常的政務を処理する施設をさすことから、溝を境目として西側に邸宅の中心建物、東側に台所など生活を支える施設があったことが明らかとなりました。

また、平安時代中期以降、東西の姉小路が大規模な溝（水路）となったことは、南北の野寺小路・道祖大路（春日通・佐井通）などで見つかっている大規模な溝（水路）と考え合わせることで、平安京右京域の整備状況を明らかにする貴重な発見となりました。

（山本雅和）